

発行 靖国神社国営化反対福音主義キリスト者の集い(略称「つどい」) 代表・西川重則 TEL/FAX 042-574-9210  
事務局 西東京市柳沢 2-11-13 西武柳沢キリスト教会気付 HP <http://yasukuninotsudo.christian.jp/>  
例会 毎月第3金曜日 7:00~9:00pm (祝日の場合第4金曜日)  
会場 たんぽぽ舎 TEL 03-3238-9035 FAX 03-3238-0797

---

## ヤスクニ・レポ 201

### フィールド・ワークにご参加を

代表 西川重則

1

先日キリスト者遺族の会が今後の課題について話し合っているときに、「フィールド・ワークをやりませんか」という私の提案が認められ、決定し、今年九月三日(土)午前一〇時から午後三時までとし、国会の正門前に集合し、最後は靖国神社で解散ということで、早速多くの団体に呼びかけることになった。

フィールド・ワークはある部屋で講演するということではなく、野外で歩きながら学ぶという、野外での公開学習会と言えれば分かり易いかも知れない。私は時々今までも提案したことがあり、賛成され実行した経験があり、今回は久しぶりであり、多くの団体に知らせることになった。講師は私であり、生きた学問のひとつと言ってもよい。

それだけに、講師の学問的・歴史的実力が問われるので、よく学んで正確な知識がなければならぬ。国会・警視庁・皇居・靖国神社などを直接調査・研究するので、訪問に際し、警視庁の場合も、正式に許可されねばならない。個人的には許可されていると思っているが、改めて正式に許可されねばならない。皇居に行くために、近道は桜田門から行くことが便利だが、桜田門と言え、周知の桜田門外の変についての歴史を話さねばならない。江戸幕府から明治時代への変革に直面した時の暗殺事件・激変の時代における人間の悲劇を象徴する出来事として語らねばならない。

皇居についても戦前・戦中・戦後の歴史を正確に学ぶことが求められる。敗戦の日における皇居前の広場は余りにも有名であろう。

日本国憲法が公布・成立した後の象徴天皇と民衆との関係がどのような状態だったかを考えさせる出来事その他についても皇居をめぐる戦後史は重要な学びとなる。

フィールド・ワークに若い世代の参加が望ましいことが当然のこととして重視されるだけに、具体的

に呼びかけ、納得して参加されることを期待しているが、参加者が今日の状況を直視し、貴重な一人一人の学びを生かして協力してほしいと願っていることを申し上げたい。

最後に靖国神社であるが、靖国神社はよく知っていると思われ勝ちだが、決して楽観は許されない。靖国神社の成立をめぐる諸問題から戦前・戦中・戦後の諸問題・諸課題は複雑・重要な諸課題を考えねばならない。靖国神社の廃止論すらあったのに、なぜ存在が許され、その後参拝者が多くなったのか。アジアの国々・人々が靖国神社についてどう考えているのか。それはなぜなのか。フィールド・ワークとは、「現地または現場での採集・調査・研究」(岩波国語辞典 第六版 西尾 実他編 一〇四一頁)と解説されている。

講師の私の責任が想像以上に大きいことが理解されよう。参加者と共に学び合う絶好の機会であることが分かっていただけよう。

〈ただし靖国神社の解説は《六・三〇》集いにゆずることになっている。〉

フィールド・ワークについては以上で、以下、厳しい戦後七一年の政治状況を思うにつけ、私たち自身の今後の責任課題について考える必要がある。

今後の課題については、今年六月三〇日の私たちの主催の集会で、講師である私の考え方であるが、共なる学び、共なる信仰の戦い、国境を越えた国際連帯の戦いなどを確認することが極めて重要であると思っているが、その点について、幸い「これからのこと」についての貴重な発言をされた韓国の李仁夏(リ・インハ)牧師が私に教えて下さった以下の言葉が最も私たち日本人に対するふさわしい勧めとして、是非読んでいただきたいと心から願っている。

書物をお持ちの方々がおられると思っているけれども、『宗教弾圧を語る』、小池健治・西川重則・村上重良 編、岩波新書、一九八九年一〇月二〇

日、第4刷発行であり、私の担当だった朝鮮の植民地支配の悲劇の時代の悲惨な出来事を学びながら、日本人としての立場から真剣に考えさせられた私が、今もなお再びくり返してはならない侵略・加害の歴史である隣国の方々との交わりをしながら、今後の課題として、朝鮮だけでなく、深い反省・謝罪の旅をしながら、戦後の韓国や中国などに出かけて行った貴重な私の体験から、『宗教弾圧を語る』岩波新書で、李仁夏牧師と出会い、言葉に表わせない今後の課題について教えられたことを、私の言葉でなく李仁夏先生の示唆に富んだ歴史の事実に基づく歴史の教訓であることを、私たち日本の国、日本の社会に生きているすべての日本人に対する教訓であることを考え、以下、採録したいと考えた次第である。

「これからのこと」

—それでは、最後に、これからのことについて、先生の率直なご感想なり、ご意見なりをおっしゃってくださいませんか。

「まず申し上げたいことは、今後日本人が自己の歴史を再検討される場合に、自己を見つめるだけではだめだということです。なぜなら、自己を見つめるだけでは何も出て来ませんから。展望は、他者との関係のなかでだけ出てく

るものです。そういう意味で、関係は鏡だと思います。朝鮮の植民地支配の歴史のなかで、日本が果たしたものは何であったかを、関係のなかで徹底的に考え直してみることが、日本の今後のために絶対に必要なのです。宗教弾圧一つとってみても、朝鮮人への弾圧を赤裸々に学べば、そのことはもっともよく分かるはずですが、そういう点で、日本人のなかで、ヤスクニ闘争をやっておられるかたがたが、自然にアジアに目を向けるようになったのは、むしろ必然の帰結といえます。いくら天皇制を問題にしても、日本人のなかでだけ学んでみても、その問題の深さがよく見えないのはむしろ当然でしょう。……」

私がアジアの視点に立って、天皇制・国家神道体制下の侵略・加害の歴史の事実を深刻に受けとめ、学びの徹底を声を大にして警告しているのは、李仁夏牧師と同じ思いからである。私が謝罪の旅と言い、韓国そして中国に何回も行っているのは、まさに日本人が天皇制の自民族中心思想の歴史、とくに「軍国主義の精神的支柱」である靖国神社の思想からの解放をめざす論理・運動であることを確認して終わりたい(二〇一六・六・一二)。